



英国での「カレッジ」ライフ

あんどう しんじ*
安藤慎治*



世界最古の大学はイタリアのボローニャ大学と言われていますが、英語圏ではイギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学が有名です。両大学とも街の中に「学部」(Faculty)と「カレッジ」(College)の建物が点在しています。中学校時代にはCollege=短期大学と教わりましたが、イギリスの歴史ある大学では意味が異なり、大学で働く教師と学生が同じ建物に住みともに生活していく学寮のことで、居室のほかホール(食堂)、厨房、教室、礼拝堂、談話室、図書室、バーやスポーツ施設などから構成されています。日本の大学は、ほぼFacultyの機能を持つだけですが、イギリスの大学では今でもCollegeが“大学の本質”と考えられており、学生の個人指導、社会活動、パーティはもちろん入学試験の決定権までを持っています。

私は1998年にイングランドで3番目に古いダーラム(Durham)大学に約1年間滞在し、R. K. Harris教授のもとで高分子物質の¹⁹F固体核磁気共鳴(NMR)を研究する機会を得ました。ダーラム大学も創立以来、伝統的な「カレッジ」システムを採用しており、私はFacultyであるDepartment of Chemistryの客員研究員であるとともに、St. Mary's CollegeのFellowとして滞在しました。カレッジにはさまざまな専門分野の学者や研究者がいますが、私が滞在したSt. Mary'sは120年の歴史をもつ女子カレッジであったことから、教育学や地理学、そして神学(!)の先生が多かったようです。大学のFacultyは“国立”ですが、Collegeは独立採算の“私立”なので、滞在費はそれほど安くはなく(夫婦2人、2DKに住んで月14~16万円、食事代込み)、そのため研究員は学外のアパートに住むことが多いのですが、カレッジは英会話の訓練のみならず、英国の伝統や文化、イギリス人の考え方を知るには最高の環境でした。

ダイニングホールにはHigh Tableと呼ばれる学生達の席から1段高くなったフロアがあり、カレッジのフェロー達は原則として3食をそのハイテーブルで取ります。食事はセルフサービスですが、学生達とは別に用意され、ほとんどのフェローとはすぐに顔見知りになります。ダーラムを含むイギリス北東部は、Geordieとよばれる強いアクセント(方言)で知られる地域ですが、常時10人以上いる外国人を含めてフェロー達のほとんどがきれいな英語を話すので、会話にさほどの困難はありません。毎日曜日のフォーマルランチや月1回のフォーマルディナーでは、開始20分ほど前に全身をすっぽり包む真っ黒なガウンを着てSenior Common Room (SCR)と呼ばれるフェロー専用の談話室に集まり、食前酒を飲みながらおしゃべりをします。President of JCRと呼ばれる学生代表が呼びに来ると、Principalと呼ばれる校長先生を先頭に整列して食卓につき、全員でラテン語のお祈りをしてから一斉に食事をとります。学生達もみなジーンズやTシャツの上にガウンを着ており、2度目のラテン語のお祈り(約30分後)が終わると学生は全員が退席しなくてはならないので、食事の前にお菓子やパンを食べています。テーブル上にならぶのは悪名高いイギリス料理ですが、食材や料理の種類が少ないことを除けば決してまずくはありません。80年代に狂牛病が出たためローストビーフは一度も出ませんでした。水ゆで野菜(料理に下味をつける習慣がないので“塩茹で”ではない)やベークドビーンズ(甘く煮たトマト味の大豆)は日本人の口にもあい、またフィッシュ&チップスは私の大好物でした。毎夕食後にはSCRでお茶を飲みながらおしゃべりをしますが、みな話題が豊富で日本や東洋への感心も高く、インテリ層の教養の高さには感心します。

ダーラム大学ではすべての教員はどこかのカレッジに所属することになっているので、たまの食事や会議、パーティの時だけやってくるフェロー達もいます。そんなひとりに、ときどき朝食を食べに来る高名な物理学者がいたのですが、80歳以上と思われるのに大学に毎日歩いて通い、会うたびに「君は昨日どんなことを見つけたのかい？」と聞かれるのでちょっと閉口しました。最初は意味がわからず、自分の研究を説明しようとしたのですが「いや、君が昨日何を見つけたのかを教えて欲しい、科学者なら毎日何かしらの発見があるだろう？」と言われ、それからは「その先生に会ったら今日はこれを言おう」などと考えるようになりました。イギリスの科学者は、やはり日常生活と学問が一体化しているようで、彼らにとっての科学と私のような“にわか研究者”にとっての科学の違いが明らかになった気がします。P. ヴァレリイは、ヨーロッパの本質は、ギリシャの伝統、キリスト教、そして科学的精神と言いましたが、St. Mary'sでも、ギリシャ神殿を思わせるドーリア風の建物、キリスト教の立派なチャペルはすぐわかります。そして、3つめの科学的精神もフェロー達の毎日のおしゃべりの中に強く生きていました。科学そのものは万国共通でしょうが、近代科学の歴史やその根底にある考え方にはヨーロッパ人、特にイギリス人の特質が色濃く反映されているように思います。1年弱の短かな滞在でしたが、研究に対する考え方だけでなく、毎日の生活や自分の人生観においても忘れられない経験となりました。みなさんも機会があれば、ぜひ英国の伝統が息づく「カレッジ」での生活を体験してみてください。

* 東京工業大学大学院理工学研究科 物質科学専攻物質設計講座 教授

〔自己紹介〕1960年 東京都杉並区生まれ。1989年 東京工業大学博士課程修了。日本電信電話(株)入社後、境界領域研究所主任研究員(含フッ素ポリイミドとそれを用いた光導波回路、及び光導波部品の研究開発)。1996年 東京工業大学高分子工学科助教授。1998年 英国ダーラム(Durham)大学 客員研究員(固体¹⁹F-NMRによる含フッ素高分子の構造解析法の開発)。1999年 復職し、東京工業大学有機・高分子物質専攻助教授。2006年より現職。

専門は、含フッ素高分子の光物性と光機能性、固体NMRによる高分子構造解析。